

先人の知恵から

10

かうんせりんぐるうむ かかし

河岸 由里子

今回で 10 回目。やっと「う行」が終わる。この 10 回を振り返ると、さまざまな諺を見直した。このように諺を意識すると、使うことが増えることに気がついた。もっともっと諺を大事にしていきたいと、この 10 回の節目に思った。

今回の諺は次の 8 つ。

- 馬の耳に念仏
- 馬を水辺に連れて行けても、
水を飲ませることはできない
- 生みの親より育ての親
- 海の物とも山の物ともつかぬ
- 裏目うらめにでる
- 噂うわさをすれば影がさす
- 生んだ子より抱いた子
- 運を天に任せる

<馬の耳に念仏>

人の意見や忠告に耳を貸さず、少しも効果かえりが無いことの例え。「馬耳東風ばじとうふう」、「蛙かえるの面に水つら」、「どこ吹く風」も同様の意味。

この諺は一般的に良く知られていると思う。親子の間で聞かれるのは、思春期の子が親の言うことを全く聞かない時などに使われる。又支援者も度々使っていると思う。入院したほうが良いと言っても「それほど悪くは無い」と言って入院に繋がらないとか、「特別支援の方がお子さんには合っていると思う」と伝えても、「うちの子はそんなに馬鹿じゃない!」とか、どんなに一生懸命理解して貰おうと説明しても、全く拒否されてしまったり、分かってももらえなかったりなどという場合にも使ったりする。

しかし、筆者としてはこの言葉を支援者

に贈りたい。支援者にも、人の意見や話をきちんと聴けない人、自分は正しいと思い込んでいる人がいる。

「おごり」程醜いものはない。すべてを知ったと思い込んで人の話など聞こうともしない人がいる。意見を言ってくれる人の話をきちんと聴く事が出来ない人は支援者としての資質に欠けると思う。

自分と違う意見を持っている人は、自分にとって役に立つことも多いのに、みすみすそのチャンスを生かせないとしたら、自分は成長することも変化することも無いだろう。自分にとって心地よい事だけを聴こうとしていないだろうか？自分におごりは無いだろうか？支援者は常に自分を振り返り、念仏を聴ける耳を持っていたいものだ。

英語では・・・

A nod is as good as a wink to a blind horse. (目の見えない馬に頷いても目くばせをしても、同じことだ。)

<馬を水辺に連れて行けても、水を飲ませることはできない>

本人が気が進まないのに、周囲の人が無理にさせようとしても、無駄だということ。元々英国の諺。

子育てのところでこの諺を使うのは、「学校で勉強に身が入らない」とか、「塾に行かせているのに宿題もやらない」とか、「ピアノを習わせているけど家で全く練習をしない」とか、そんな言葉を聴いたときである。

本人のやる気を出させることが何よりも大事である。どうすれば、やる気が出るのかを考え、工夫することを勧め、それでもだめなら放っておくしかない。代わりに学校に行く事も出来なければ、代わりにピアノの練習をしても何にもならないのだから。

何のために、或いは何故、学校や塾に行っているのか、ピアノを習っているのか、について、じっくり話し合う事も無く、義務だからとか、皆が行っているからとか、親の希望の押しつけであれば、行く気ややる気が無くても不思議はない。子どもの気持ち聴きながら、考えてもらいたいときに、この諺は分かりやすいと思う。

英語では・・・

You may take a horse to the water, but you cannot make him drink.

<生みの親より育ての親>

生んでくれただけの実の親よりも、長い間苦勞して養育してくれた親（養父母）のほうに、愛情がわき、恩義も感じるということ。

最近、産みっぱなしの親に出会うことが増えた。実家に預けてそのままいなくなってしまった母親もいた。子育ては祖父母に任せて、仕事のため、遠くに住んでいるという両親もいた。捨て子や乳児院に預けられた子ども達。施設で育てられた子ども達。或いは養子縁組をして、大事に育ててもらって居る子もいる。施設の職員や養父母は

その子にとって実の親も同然で愛着も育っている。

この子たちの生みの親を親と呼べるだろうか？生物学的には確かに産んだことは事実で、生みの親は親である。だからと言って、育てもせずに親だと主張したらどうなるか。

子どもを祖父母に預けて何年も遠くに行っていた母親がいた。ある日その母親が再婚し、子どもを引き取りたいと祖父母に言ってきた。子どもはどうすべきか？母親に対する思いは当然ある。しかし、見ず知らずの男性を父親として受け入れ、しかも慣れない土地へ行く事にはかなりの抵抗があった。悩んだ末に、その子は祖父母を選んだ。母親は怒り、祖父母との関係性も悪くなった。

母親には母親の言い分もあただろうが、長年育ててくれた祖父母との関係性はそう簡単に引き離せるものではない。この諺をそのまま表した事例であった。

子どもは育ててもらっている人に愛着を感じる。愛情を持って大事に育ててくれる人とは猶更深い愛着を形成して行く。保育所の保母さんに愛着を持ちすぎないのは、他にも子どもがいるからで、一対一ですと見てもらったら、母親よりも愛着を持ってしまう可能性がある。長時間世話をしてもらってれば、そう言うことも起こりうるのだ。だからこそ、生みの親より育ての親ということになるのである。

<海の物とも山の物ともつかぬ>

物事の見通しについて、将来どうなるか見当がつかず、何とも言えないことの例え。その人が将来出世するかどうか、期待できるかどうか分からない若者について言うことが多い。「海とも川ともつかぬ」とも言う。

母親の相談にのっていると、よく「この子は将来父親のように理系に行かせた方が良いでしょうか？」などと訊かれる。子どもが、中高生ならいざ知らず、まだ幼稚園児だったりすると答えようがない。恐竜好きや昆虫好きが必ずしも理系に行くとは限らない。そんな時にこの諺を使っている。母親たちは、早くに子どもの行く末を決めて、一方向に伸ばしたいという思いを持っているようだ。子どもの能力や特性に気付き、得意分野を伸ばしたいという気持ちも分かるし、特に発達障がいがあるお子さんでは、それも必要な手立てかも知れない。しかし、余り早々に「この子は国語は苦手だ」などと決めてしまい、努力させないでいけば、その子は国語が得意にはならないだろう。

海の物とも山の物ともつかない間は、色々なことにチャレンジさせてみるのが大事ではなかろうか？

<裏目に出る>

良かれと思ってしたことが、逆に悪い結果となって現れることの例え。

こういうことは度々経験するのではない

だろうか？人が自分なりに考えて、何らかの手立てを決めて実行した時に、時折裏目に出ることがある。特に親と言うものは、子どもの事を常に思っているが故に頑張っ、頑張りすぎてしまうこともある。「子どものために良かれと思ってしたことだったのに・・・」とは、そうした親が、予想外の悪い結果をみて漏らす言葉である。

我々支援者も同様に、何かをした時に、良い結果を得られない事がある。「良かれと思って・・・」と言う場合に良い結果を得ることは意外と少ない。やり過ぎではないか、領分を超えていないか、本当にこれがその人にとって良いことになるのか、よくよく気をつけねばならない。下手なことをするより、傍観する方が良い場合さえある。裏目に出ることは出来るだけ避けたいと思うが、避けられない事態もある。それはそれで受け入れ、次の手立てを考えていこう。

＜噂うわさをすれば影がさす＞

人のうわさをしていると、丁度そこへその人がやってくる場合があるものだということ。「人を談うわさすれば人至る」とも言う。

この諺は、本当にびっくりするくらい真であると思う。誰もがこうした経験を持っているのではないだろうか？対人援助の仕事をしていると、しばらく音沙汰が無い人のことを、ふと思うことがある。「あの人今どうしているのだろう？元気かしら？」と。大抵の場合、余り会いたくないケースだっ

たりするが、仲間と久しぶりにその人の話をしたりすると、電話がかかってきたり、突然来訪されたりということがある。

何故これほどの中するのか不思議な気がする。「諺って凄い！」と改めて思う。

英語では・・・

Sooner named sooner come. (名前を呼ぶや否や現れる) 又は

Speak of the devil and he will appear. (悪魔の噂をすると悪魔が現れる)

＜生んだ子より抱いた子＞

生んだだけで育てなかった実の子よりも、他人の子でも幼い時から養育した子の方が可愛いということ。

前述の『生みの親より・・・』は子ども側からの捉えであるのに対し、この諺は大人側の捉えである。育てる側にとっても、小さい時から育てていけば、実の子でなくても愛情がわき、可愛いと思えるようになるが、生んだだけで育てなければ、愛着も弱く、可愛いと思えない。最近では産んだ子を「可愛くない」と言ってしまう親にも出会う。そんな時は、誰かその子を可愛がってくれる人に預けた方がその子のためだと誰もが思うだろう。

本来的には人間も動物なので、子どもが生まれたら自然に母乳を与え、世話し、愛着形成をしていくものであるが、最近は動物性が減少し、頭で考えるがゆえに、愛着形成が弱くなってきている。

生んだ子を可愛いと思えなかったら、日々の世話は辛いだけだろう。それでも抱いたり、声を掛けたり、ミルクをあげたりと世話をしていれば、段々に反応してくれるし、可愛くも思えるようになる。たとえ生んでいなくても、可愛くなるのなら、生んでいれば余計に可愛くなるだろうと、この諺を使って今日の前の母親を支えることもある。

<運を天に任せる>

結果を恐れずに物事に取り組むこと。成り行きがどうなるかは天の意志にゆだね、運命に従うということ。以前に紹介した「当たって砕けろ」や「案ずるより産むがやすし」も近い意味合いがある。

誰にとっても明日の事はわからない。ただ、人は、明日も今日と同じように訪れ、未来も来るとの予測の中で、様々な計画を立てながら生きている。

子育て支援の中でも、子どもの未来を考えながら、親を支え、相談にのっている。しかし、時には、「えいっ！」と清水の舞台から飛び降りるような事もある。

例えば、お稽古事の話でも、「最初は本人がやりたいと言ったからやらせたけど、辞めたいと言うんです。辞めさせた方が良いでしょうか？」と相談されることがある。どのくらい続けたか、どのくらい上手になっていて、その子にあっていくかどうか、などの検討事項はあるが、辞めさせるかどうかは親が決めることになる。その結果がどうなるか、ある程度考えはしても予測は立たない。そんな時は、「運を天に任せてやってみるしかないですね。」ということになる。その結果前述のように「裏目に出る」こともあるだろう。どんな結果であっても、それはそれなりに受け入れるしかない。

また、あれこれ悩んで動けない親や支援者にも、この諺は使える。とりあえず、「やってみよう！結果はきつついてくる！運を天に任せて。」と言ってしまうのは楽天的すぎるだろうか？

今回はここまで。